

平和の礎

軍人軍属短期在職者が語り継ぐ労苦



平和の礎

軍人軍属短期在職者が語り継ぐ労苦

平和の礎

軍人軍属短期在職者が語り継ぐ労苦

平成三年三月二十九日 印刷

平成三年三月二十九日 発行

編集 東京都文京区大塚五丁目三ノ十三

発行 平和祈念事業特別基金

印刷 新日本法規出版株式会社

軍人軍属短期在職者が語り継ぐ労苦

目次

第一部 労苦体験記

青春の記録
戦争体験記

井上 文夫 52
内田 善一 54

湘桂作戦

長田栄太郎 56

〔中 支〕

戦争体験記

新田 善松 1

入隊、春眠曉に破る、別れ

後藤 行男 59

充員召集令状

荒家 清隆 6

出戦務履歴（北支の巻）

萱野 明 63

湖南省における悪戦苦闘記

川本 義徳 11

たかが紙きれされど紙きれ

本庄 昇 67

湘桂作戦

道下政太郎 15

長台関の悲劇

菅原貞一郎 70

丸亀歩兵第十二連隊激戦回顧

浮田 信茂 19

戦史に残らない私の証言

杉若 久嘉 72

洋菁墟の戦争

田中 優 23

二度の傷病をのりこえて

奥野 豊蔵 76

私の戦中戦後

柿島喜左衛門 25

戦争体験記

守谷 昌平 28

〔南 支〕

激動の時代・追憶あれこれ

市川 勇 34

第三次浙江作戦に参加して

武村 正男 79

運不運は紙一重

秋田 守之 38

西路作戦

井上 光雄 80

私の半生記

松村 包雄 41

湘桂作戦に参加して

近藤 光次 43

浙贛大作戦体験記

北口 功忠 46

日ソ戦闘記の体験から

松本 春男 85

〔満 州〕

旧満州方面実体験記

ダモイ青春

王道楽土であつた「はず」の満州

我が軍隊生活の回顧録

終戦後の満州の労苦

〔南方〕

セブ島防空戦記

マニラ一番乗りの道は険しく

南方戦線

私の従軍記

戦争と平和そして国際親善

南太平洋作戦記

北緯五十度以北から

サンゴ礁の南太平洋まで

満州―南方作戦転戦記

従軍中の体験手記

初年兵の思い出より復員迄

終始初年兵

岸川 満 89

国松 清 96

大場 国治 99

村橋 義雄 102

村上 逸夫 108

佐藤 義廣 115

寺島 貞次 119

上神谷林太 122

中村倉一郎 125

森田 六郎 129

堀内 初一 135

武部 敏克 138

山本 武行 142

加納 種一 145

岩井 幸治 148

富樫 大助 150

幻の残留勤務「ペテワン集積所」

〔ビルマ〕

北ビルマ戦闘記

ビルマ作戦の思い出

包囲された将校斥候

ただ一途にお国のため

〔その他〕

五円の送金

北千島の占守島に戦う

戦いすんで

第二部 聴取調査記録

中支の黄梅、常德、衡陽作戦

常德殲滅作戦

軍旗を捧持し重圍脱出

支那事変武漢攻略と浜松の艦砲射撃

篠田 市郎 153

嘉村 甚次 161

下川 真三 166

柴田伊左衛門 169

元島 和男 173

松永 幸助 175

富永 繁久 179

嵯峨 晃 187

西村 政治 200

松本 莊衛 212

岩田 義雄 220

長沙・湘桂作戰	
連隊本部行李中隊	
南支の戦闘	
中支常德作戰の思い出	
大東亜戰從軍回顧談	
變転極まらない軍隊の生活	
砲兵第百四連隊（鳳）	
湘桂作戰・馬・マラリヤ	
帰ってみれば天涯孤独	
若い憲兵の中国での終戦前後	
湘桂作戰舟を曳いて溯る	
南支派遣純兵団の戦闘の裏で	
仏印の明号作戰	
私の軍隊生活の苦勞の実態	
終戦後の戦闘	
ビルマの戦線 末期の壮部隊	
敵潜の雷撃をのがれて	
仏領印度支那 軍紀厳正 討部隊	
バターン死の行進	

高木 義輝	225
鈴木 正禧	231
松添 久	235
小林 年男	238
赤間 清吉	243
遠藤 金次	247
河野 政信	249
鬼塚 国男	252
岸 欣一	254
石井 孝	256
田中 稔	259
岩本 栄光	262
小椋 武光	265
加藤 武憲	269
宇賀広太郎	272
西村 保	276
中村 正直	278
川並 藤一	280
伴 八三	

上海戦は輜重 満州は山砲隊	
上海敵前上陸の実戦と	
満州の関特演訓練	
満州最北端 三年三か月の苦しみ	
歩兵砲満州より湖南へ	
不沈駆逐艦「楨」	
衡陽攻略戦は屍を越えて	
野戦病院	
同年兵の語る独立山砲第五一大隊	
あ と が き	

相原 良光	283
平井 秀利	286
末木 定松	288
吉田 政雄	290
松井 喜一	292
萩原 祐	296
大川 トヨ	299
竹市 松義	303
山口 満	
佐々木政男	

第一部 勞苦體驗記

中 支

戦争體驗記

福島県 新田 善松

私は昭和六年徵集現役兵として、朝鮮国境恵山鎮守備隊第一中隊要員として感興歩兵七十四連隊に入隊した。六月二日国境に匪賊が出たとのことで除隊式寸前の満期兵のうち、上等兵のみが分隊長要員として除隊延期となり、小生ら初年兵とともに自動車で夕方恵山鎮に到着した。

兵舎に入る前に整列、中隊長訓辞、銃剣と実弾三〇発

を支給され、夜鴨緑江を渡り、長白県長白府から帽子山（モールサン）街道を西進、匪賊討伐に参加した。

それから班長も戦地に出勤中、下流二〇里くらいの所に新賀波鎮守備隊があり対岸は十三道溝（満州）に出勤勤務。我らの仲間は全部青年学校終了者のみのため一年半で帰休、除隊した。

そのときの珍話を一つ。それは私が過番下士官を勤めていた時のこと、零下四二度でしたが、部隊の下肥汲取り人である朝鮮人は鋸、おの、ハンマー、南京袋、軍手、箆及び天秤棒を持って便所の中に入り、エベレスト山のように高くなった糞を立ち木を切るように、おので根回しをし、鋸で切って箆に入れ、粟畑や豆畑に運んでいた。

兵舎内はオンドル式の暖房で窓のガラス戸は紙を字形

に張っておくが、外気が零下四〇度余もあるので、我々の息がガラスの内側に凍りついて、一〇センチくらいになる。小便も凍るなどの話はあったが、出る途中で凍ることはなかった。でも行軍その他で外を歩く時は、常に目をこすらなければ出る息が凍って目が見えなくなる有様。上下のまつ毛がついてしまうのです。また銃をかついで雪が積桿についた際、口で吹き下ろす時、間違つて唇が積桿にさわつたら唇の皮がむけてしまう寒さだった。

珍話はこのくらいにして私の第四回目の召集は昭和十二年九月十七日。充員召集歩兵二十九連隊留守隊、同歩兵六十五連隊第八中隊に入隊した。九月二十五日屯営地出発、同二十八日大阪港出帆、十月三日上海に上陸した。

陸戦隊は上海の一地点のみは占領していたものの敵の追撃砲はいつも飛んできていた。その夜は日本人が経営していた東洋紡績工場に宿泊したが、南京虫がたくさんおり手首、足首及び首の回りを刺され、また時折、追撃砲の攻撃及び空襲で眠れなかった。翌朝上海を出発、口網灣に出撃し天幕露営及び陣地構築をした。夜になると

赤、青、黄色の照明弾が上がる。

上海近くにいるうちは当部隊は予備隊だったらしい。十月十日第一線出撃、魔橋頭戦において敵は猛烈に攻撃、夜に入って追撃砲の援護の下に笛や太鼓で突撃を敢行してきた。我が軍はこれに応戦したが、敵の攻撃は豆いりのようであった。軍用犬もすくんで人間の後ばかりついて回り邪魔になるくらい。この戦闘で下重准尉以下七、八人の戦死者を出した。准尉は追撃砲にやられて片足だけの戦友を背負ってきたが、その後敵弾に倒れた。

この時、小生は指揮班岡本軍曹の配下だったが、捕虜一人を納屋の柱にしばりつけ日本の煙草を吸わせ、通訳を使って種々話を聞いた。本人は香港出身の予備役召集、二十八歳とのこと。入れ歯で話をするのに前歯がぐく動いていた。そして敵は一日一人で二〇〇〇発を撃てば第一線交替になるとのことで、敵の攻撃は雨あられ、豆いり以上の攻撃であった。

小生は翌日、捕虜を連隊本部後方約八〇〇メートルの所に連行した。本部には萩州師団長、両角部隊長以下天幕の下、六尺机二個を連ね地図を広げ、肩掛金バレン姿

で作戦を練っていた。そこに現役時代の戦友、福島県田村郡川前村の根本武君が当番兵としていた。部隊長は「これからは下士官以上を捕虜にした場合のみ連行せよ」と命令した。

それからは毎日が激戦。十月二十日老陸宅の攻撃命令が八中隊に下り、それまで第一大隊が攻撃部隊であったため第二大隊長山口武臣少佐が第一線の第一大隊本部に移動した。老陸宅は西の方を指して揚経クリークが東から西にあり、途中三か所のクリークを越え対岸が竹藪の一軒家。さらにその次のクリークの対岸が老陸宅の本陣地である。敵は火焰放射器を使っている。第三のクリークまでは、夕方工兵の決死隊により交通壕が貫通しているとのことであった。

小生は大隊長より「本日午後二時、八中隊は老陸宅に突入する。お前は八中隊が突入したらば、この信号弾を二発上げる。そしたら第二大隊本部を老陸宅に移動するんだ」といわれ、信号弾二発をもらって中隊の来るのをまっていた。時刻は迫り友軍の飛行機が老陸宅の頭より爆弾を投下、野砲、山砲、歩兵砲と援護射撃。しかし八

中隊の兵は各個躍進で来るので七、八人しか集結しなかった。大隊長は七人でも八人でも突入しろとのことで、小生が老陸宅に向かって進んだ。

ところが第三のクリークまで貫通しているはずの交通壕が、約三〇メートルくらい残っていた。そこに出ると右前が馬家宅、左が老陸宅で双方の弾丸が頭上で交錯する。兵はほとんどここで戦死、志賀繁中隊長、小松山小隊長ともに戦死。一部第三のクリークに入った兵もあつたろう。小生はそこで老陸宅の本陣地には突撃不成功に終わったが、万止むを得ず信号弾二発を上げた。後から大隊長が前進前進と本部の兵を率いて進んできた。

その右前の機関銃陣地は友軍の陣地。前進前進と壕内にいる兵を一人一人尻を揚げて出した。小生も大隊長に尻揚げされるまで待つていられないと右側の田圃に出た。午後二時はとうに過ぎ日本の砲撃は全然なし。敵老陸宅、馬家宅の陣地からは銃眼から真赤に火を吹きながらの攻撃である。壕の右前の支那人墓地の高台には我が軍の重機の陣地があり、小生はその右側に進出、夜闇になるまで機関銃陣地をみつめていた。射手、弾薬手、全員戦死

していた。

我が軍の突撃が不成功に終わったため、敵は機関銃の銃身、弾薬箱を目標に猛攻撃。そのうち東の方大隊本部付近から横に三〇肩間隔に迫撃砲の一斉攻撃。見ていると爆発で土煙、またクリークに落下の水柱が一丈もの高さになる。いよいよ今度くる弾丸が俺の所にくると思っ頭を地に伏せていたら、小生の後方一〇肩の所に地震のような振動とともに落下した。幸いにそれが地響きだけで不発に終わった。その時ばかりは神の助けかと、我が郷里村社麓山神社に合掌した。

まもなく夕方になり闇夜となる。大隊長に尻を持ち揚げられ右前に出た男たちも一人ぼっちだったのだろう。五分おきに交通壕に入る。壕内は隙間もなく満杯、そのうち第三のクリークまで交通壕が貫通して、その晩のうちに老陸宅直前の竹藪の一軒家にたどり着いた。翌朝、夜明けと同時に友軍の砲撃が始まり、昨日まで敵がいた中島、大きい樺の木があったその樺の枝が砲弾で折れ、下にいた兵士を直撃し、そこらでもこちらでもヤラッチャラッチャと叫んでいた。

そこへ橋本曹長が四つばいになって来た。「新田元気か、中隊を全部集結させろ」とのこと。小生は周辺を探したが総勢八人だけ。橋本曹長曰く「志賀中隊長、小松山一小隊長戦死。現在生存者は兵八人。それもみな血便患者でほとんど戦闘能力がないと大隊長に報告してこい」とのこと。夕方渡ったクリークに入った。戦死者がぶよぶよ浮かぶクリークの上を泳いで交通壕に到着。大隊本部へ走り報告した。そこで「中隊長、小隊長の遺体を持って引き揚げてこい。中隊は馬家宅正面の揚経クリーク側に移動した。そして今晚第六中隊と共同で馬家宅攻撃」とのこと、原田少尉が中隊の指揮をとった。その原田少尉も双眼鏡で敵状視察を始めると同時に狙撃され、目貫通で即死した。小生らは畜生と口を結び、いよいよ今晚は突入と意気込んでいた。

夜になると敵は鉄条網作りを始めた。カチリカチリと鉄線を切る音がする。一刻も早く突撃しなければ今晚中に鉄条網は完成する。即座に決死隊を作って鉄条網を切断し突破口を作らなければならない。小生も決死隊を志願した。しかし、その晩の夜襲は中止となったのみなら

ず、お前は命令受領の指揮班だからだめだと言われた。

連日の激戦続き老陸宅の突撃で中隊は大打撃を受け残兵十数人。他中隊も相当戦死者もあり部隊集結にまにあわなかったと考えられる。そして原田少尉の戦死により中隊に将校一人もなく、橋本曹長も老陸宅前の陣地で腹部貫通で一線を下りた。そして中隊長には聯隊旗手の鈴木少尉がついた。

その日、中隊長から「第一次補充として小泉少尉以下十数人が中隊に配属になる。お前迎えに行つてこい」との命令。連隊本部の方へ向かい五〇〇ㇾぐらい行つたところで小泉少尉と兵たちに出会った。内地から来たばかりの小泉少尉は朝日の煙草を一本出してくれた。また白い切餅と上海付近で調達したとみられる角砂糖一個をもらって食べた。そして午後、小泉少尉を案内し中隊に帰った。

その翌朝、朝霧を利用して六中隊と八中隊に馬家宅前陸家橋に向かって突撃を敢行した。小生も大隊長の号令で突入した。山口武臣大隊長は軍刀を抜いて両手を上げ万歳万歳を叫んでいた。今まで何回も突撃が不成功に終

わっているのだ、大隊長も嬉しかったことだろう。その途端、敵弾がアゴから左鼻下を貫通し、大隊長は第一線を下がった。山口大隊長負傷後は現役の機関銃隊中隊長、片岡中尉が大隊の指揮をとった。この方は体は小さいけれども度胸は良く、鉄カブトは持っているが背に負って頭にかぶったことがなく、勇敢に指揮していた。

当時は一中隊で敵の一陣地を占領しなければ第一線の交替はないとのこと、この時、突撃が成功したので仙台の百四部隊と両角部隊が第一線交替とのことで百四部隊長後藤少佐が後方に来ているのに、小泉小隊が第一線に出たまま帰らない。中隊は斥候を出し探した結果、前線五〇〇八〇ㇾの地点で壕を掘り、内地から持ってきたばかりの餅や煙草を食して第一線を死守していた。そして我々は今度は白沼という所で予備隊として警備とのこと。翌朝、連隊会報で八中隊の小泉少尉は勇敢なる青年将校で、二日二晩食もとらずに第一線を死守していたのとことで殊勲甲になった。その後二、三日で馬家宅、老陸宅後方の輸送路を遮断したため敵は退却していった。

充員召集令状

福島県 荒 家 清 隆

真夜中「今晚は」の声に何事かと母が起き、玄関を開けると弓張り提灯を持った役場の人「清隆さんへ動員令です」という。なるほど赤い色の紙に充員召集と印刷されている。赤紙とはこのことかと初めて知る。よく見ると「昭和十二年九月七日十時、歩兵第三十連隊留守隊に入隊すべし」とある。

数日後、三十連隊の営門を通る。身体検査も異常なし。野戦瓦斯第五中隊に無事入隊できた。編成が終了したもののから順に、雪中演習場へゆき被服の支給を受ける。行ってみると現役当時、歩兵七十四連隊の同じく毒ガス教育を受けた仲間が七人ほどいた。

我が部隊は、一個分隊が歩兵一五人、輜重兵五人、馬五頭（車両五台）である。これが三個分隊で一個小隊、また三個小隊で一個中隊である。それに輜重段列兵五〇、

馬五〇、車五〇で、日本最初の化学部隊だと聞いている。

翌日、習志野学校より教官として大尉殿ほか助教、助手の方が来られて、実際に毒ガスの使用についての教育を受けることになった。練兵場の一晚奥に集合、緑、黄、赤の順に実験した。現役当時は、瓦斯講堂ではんの数分間の経験をしただけであつたが、今度はガス隊なのだ。何でもひと通り経験しなくてはならないのだ。イペリットやルイサイトという、ほんもののビラン性ガスは初めてである。今でもリンゴの腐つたような臭いだったのを覚えている。最後に防毒面を着用して、サラシ粉を多量に使い消毒をして、縄張りをしてきた。こんな教育が二、三回繰り返された。

教育を終えた我が五中隊は大隊本部と同一行動をとり神戸へ向かった。神戸を出航して三、四日すぎたころ、今まで青々としていた海が夜明けと共に黄色に変わってきた。船員に聞くと揚子江河口だとのことで、上陸は上海だった。

上陸後四日目に出発。今日から毎日、夜行軍とのことだ。自分は兵二人をもって金庫監守を命ぜられた。金庫

といっても軍用行李だ。金はともかく、重要書類が入っている。敵襲などのときは死守せねばならない重要な任務なのだ。

一週間ほどたったころ第五中隊より「混成一個小隊を編成し南京攻撃に参加すべし」と命令があった。私は一番に志願し、後を追ってわれもわれもと志願者があり、たちまち編成が完了した。本部のトラックに飛び乗り出発した。始めは順調にスピードも出たが次第に進まなくなった。車両部隊で混雑しているのだ。馬や敵兵の死体がゴロゴロしており、次第に砲声も大きくなる。だんだん大砲の炸裂する音が聞こえてくる。そのうち南京の中山門へ向かうということが分かった。しかし、ほどなく南京が落ちたとの話が伝わり、折角ここまで来たのに南京攻略に参加できず残念であった。

一月も下旬に近づいたころ、我が部隊に「第十三師団長の指揮下に入るべし」と命令があった。部隊は、南京の中華門を通り下関に出た。さすが首都であると驚いた。あの城壁の立派なものにもびっくりした。下関より小舟（大発）で対岸の浦口へと渡る。三日後、目的地の除県に到

着し、第十三師団長、萩州中将殿の訓示があり指揮下に入る。私物をまとめ輜重に積み、明光へと急進する。次第に砲声が近づく。野戦病院の近くで背のうを除き軽装となった。

ここからは我ら歩兵のみの前進だ。鉄橋を目標に進む。機関銃弾が飛んでくる。各分隊が散開して前進、ようやく堤防へたどりつく。川幅は三〇メートルだが、深く流れが早い。ここで工兵隊の小舟に乗り渡河作戦だ。物凄い弾丸がくる。舟底に伏せて対岸へ上陸できた。堤防の内側を鉄橋の方へ進む。先に第一六中隊が到着していた。一六中隊に攻撃命令が出た。「突撃、進め」と、立ち上がったばかりで古池中隊長以下五人が戦死した。今度は本部の板垣小隊の率いるテナカ砲の攻撃直後、「第五中隊第一小隊が突撃すべし」と命令が出た。テナカ砲の炸裂にて敵兵があわてているところに、我々が突撃に成功した。突く、撃つ、なぐるなど健闘した。その時トーチカ二基を占領した。トーチカの後方に回り入口に行ったところ、外側からカギをかけ出られぬようになっていた。あれでは必死に抵抗しなくてはならないはずで、我が中

隊でも戦死七人、負傷十数人を出したと聞く。

その後、前進また前進して約一〇〇〇呎ぐらい進んだ。逃げ遅れた敵も相当いたので撃滅した。

翌日の昼近く、「ガス隊は明光に集結せよ」の命令により最前線を後にした。昨日、背のうを置いた民家に泊まることになり、夕食を済ませた。午前二時ごろ寝ようとしたら全員起床。「二食分の飯盒炊飯をせよ」とのことで、全員準備する。約一時間で終わったころ、中隊長命令。「荒家上等兵は兵五人をもって敵状偵察に出よ」とあった。直ぐ準備、隊長の所へ行く。小隊長もおられた。「我が部隊は、今百十六連隊第三大隊が苦戦しているので救援に向かうが、位置が不明だ。また敵味方が入り乱れているから、気をつけていくように」と言われ、方向はアチラだと地図を見て指をさす。地図を見ると、小高い丘を三つほど越えなければならない。「よし、それでは行てきます」と出発した。

夜が白々と明けるころ、壕の中に兵がいるのが見えた。早速近づいて尋ねたところ、大きな壕の奥の方で「おれが佐伯だ」との声が聞こえた。私はハッとし、捧げ銃の

敬礼をして「只今野戦ガス隊が救援に参ります」と申し上げますと、さすが陸軍少佐殿も嬉しうであった。

「只今から本隊へ連絡に行つて参ります」と、二班に分かれて急いだ。約一時間ぐらい後方へ進んだ所で、我が中隊と出合い報告をすると、「こゝ苦勞」とねぎらわれた。

ただちに、私が先頭になり壕の中の大隊長の所へ急ぎとつて返す。「只今到着しました」と報告する。大隊長と中隊長は初顔合わせで、しばらく打ち合わせが続いた。そのうち大隊より出た斥候が戻り、我が部隊は「右第一線に進出すべし」との命令が出た。まず第一小隊が丘へ出ようとしたら前面から猛射を浴びる。我が部隊に機関銃があつたらなと思う。我が軍は全員第一線に出て撃ちまくった。そのすきに第一小隊が突撃した。第一線に出てみると敵兵の姿は見えない。しかし敵弾はますます激しくなる。

よく見ると無数のトーチカからの射撃であつた。我らも体を横にして、エンビで身体が横になれるぐらいの穴を掘つて、次の命令を待つ。そこへ第二、第三小隊も進撃してきた。

私はこのままでは危ないと思い、トーチカの死角に出た。後を見ると死傷者多数である。そのうち「小隊は前方の集落を占領せよ」との命令が出る。他部隊に援護射撃を頼む。全員が静かに稜線上に出ると敵弾は雨あられと飛来する。我々も負けずに撃ちまくった。

そのうち分隊長が後より「荒家、前へ出る」の声。私も言われるまでもなく伏せて出た。その時、今まで見えなかった左前のトーチカより、無数に撃ち込んできた。

あつと思ひ伏せたその時だ。突然背中に熱いものが走った。我を忘れて「あっ」と叫んだ。そして意識不明になった。どのくらい経ったか知らぬが、突撃のため進出して来た戦友が私を発見、「どうした、しっかりせよ」と大声をかけたので、私もハッと我に帰った。見れば右手首から血が流れている。私は民家で軍医の治療を受けた。その時、軍医は「この兵隊はこのままでは、出血多量で死ぬ」と小隊長に話しておられた。

軍医の話では、もうちょっと上だとは何でもなかった。また、もう少し下では田楽刺しだとのことであった。ああ死ぬも生きるも紙一重とは、このことかと、今までの

戦友の戦死、負傷者を思い浮かべた。そのうち、衛生兵と五人の兵が私を担架に乗せて出発した。途中、どこからともなく弾が飛んで来る。そのたびに道路の下へ皆が伏せる。そのうち夜も深まり、寒さが増したのか、「寒い、寒い」と言っていたそうです。幸い野戦病院も早く見つかり、軍医の診療を受けることができた。軍医殿は「肺に障りがあるようだ。絶対に安静にすべきだ」と申される。その時「君は大沼郡のどこだ」と申された。「新鶴村です」と答えると、「長谷川恒雄を知っているか」とのこと。よく考えてみると、五つ年上の村長さんの長男であることが分かったので、「はい存じております」と申し上げた。「そうか、おれはあれと医大同級生だ」と言っておられた。

また軍医殿は「おれは沼沢村の中川だ。お前の命は大丈夫だ。無理はするな」と言われた。病室では朝までに五人も死んでいった。

翌朝、衛生兵が来て「君は重傷患者なので別の室へ移す」と言って連れて行かれた。なるほどその病室はうなっている者ばかりだ。私は傷口が少し痛むくらいで大した

ことはない。三日目の朝、軍医殿が来られて、「後方へ移動することになった。ほかの病院へ行っても咯血したかと聞かれたら、ハイ、と言え。また量はと聞かれたら知らないと言え」と言って帰られた。

それから担架で運ばれ列車に乗った。数時間で除県に着いた。大勢の方はここで降りたが、私たちは浦口へ行き、舟で南京の下関に着いた。そこには白衣の天使というべき看護婦さんがたくさん、私たちの着くのを待っていてくれた。そこで、今度は兵站病院まで車で運ばれた。病院について、軍医の診察を受けたとき、言われたとおり咯血のことを聞かれたので、「ハイ」と答え、どのぐらいかと申されたが、「夜でよく分からなかった」と申した。ここでも重傷患者扱いである。病室に入ると下着から全部着替えさせられたので、非常に心地よかった。絶対安静といわれ毎日上げ膳下げ膳であった。そして一週間後、婦長さんが来て「あす上海の病院へ転送されることになった。この看護婦さんが上海まで付き添って下さるので安心して行くように」と言われた。

翌朝みんなにお別れして車で港へ行く。ここからは捕

獲船を改造した病院船に乗った。風もなく、流れも静かで、快晴の旅である。看護婦さんたちも息抜きができると喜んでいた。夜は我々とトランプをしたり、流行歌を歌ったりして、次第に別れがつかくなるような気がした。

三日目、上海の兵站病院へ着いた。ここでも重傷患者扱いであった。真夜中になって背中が痛むので傷口が化膿したものと思い、翌朝診察を受けた。軍医はこれは化膿ではない。弾が入っているのだとのこと。早速手術をするようになった。

現在の医術と違い、あのころの野戦での手術だから荒っぽい。局部に注射一本して「看護婦四、五人でしっかり押さえていろ」と言うが早いか、メスがブスリ。痛いという暇もなく切り開かれた。軍医は手袋をはめ指先で弾を捜し始めた。そのうち「ほら弾だ」と取り出した。チェコ機関銃弾であった。射入口より、同時に二弾が入り、一弾は射出口より抜けたが、もう一弾はどうしたところか体内に残った。傷口が治るに従い、新しい肉のため、押し出されたのだと聞いた。これが砲弾の破片なれば出ないと申された。